

4 国際交流

[概要]

本館では、研究活動の国際性を拡充するべく、国際研究集会の開催や外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣等を行っている。2025年度の具体的な取り組みは以下のとおりである。

1. 国際戦略

本館は博物館機能を有する大学共同利用機関としてのミッションを達成し、現代的視点と世界史的視野のもとに、日本の歴史と文化に関する研究を推進する国際拠点としての役割を果たすため、以下の国際戦略を制定している。この国際戦略に対応するかたちで、海外研究機関との学術交流協定等の締結、国際交流事業等の充実、外国人研究員等の受入、国際シンポジウムの開催等に取り組んだ。

(組織的な連携)

- ・海外の機関との組織的な連携を強化する。当面は、東アジア、ヨーロッパ及び北米を重点地域とする。
- ・日本歴史研究の国際的なネットワークを構築する。

(共同研究、成果発信)

- ・国際的な共同研究を推進し、成果の国際発信を強化する。
- ・展示、フォーラム、博物館資料の活用等を通じて国際共同研究の可視化、高度化を図る。

(若手研究者育成)

- ・協定機関との派遣・招へい等を通じて若手研究者の育成を図る。

2. 学術交流協定等の締結

天一閣博物院（中国）およびダラム大学（イギリス）と新規に学術交流協定を締結した。

3. 学術交流協定等に基づく国際交流事業等の充実

ダラム大学東洋博物館（英国）との「北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援」等6件の国際交流事業を推進した。

4. 外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣

本館の受入制度に基づき、外国人研究員を1名、外国人招へい研究者を2名受け入れた。

5. 国際シンポジウム等の開催

共創先導プロジェクト（共創促進研究）日本関連在外資料調査研究「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」の一環として、国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—遣外使節団の贈答品を探して」（2026年1月10～11日、主催：国立歴史民俗博物館ほか）を一橋講堂およびオンラインで開催し、本館の国際化と研究分野・研究手法の多角化を研究者コミュニティの内外に示すことができた。

国際交流担当 高田 貫太

〔国際交流事業一覧〕

	相手機関名	事業名	事業主体者
新規	韓国 国立中央博物館	先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅴ	研究部 高田 貫太
継続	韓国 国立慶北大学校 人文学院	東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究	研究部 三上 喜孝
	韓国 国立釜山大学校博物館	国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力	研究部 高田 貫太
	台湾 国立台湾歴史博物館	日本と台湾からみた地域歴史像の解明	研究部 山田 慎也
	英国 ダラム大学東洋博物館	北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援	研究部 日高 薫
	韓国 国立民俗博物館	日韓共同による民俗研究の新構築	研究部 松田 睦彦

(1) 先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅴ
2025～2027年度
(事業主体者 高田 貫太)

1. 目的

学術交流協定締結機関である韓国国立中央博物館（以下、中央博）とは、2009年度～2012年度に第2期、2015年度～2018年度に第3期、2019年度～2021年度に第4期の共同研究を行い、総合展示第1室リニューアル事業に対する中央博側の協力を得ることができた。

引き続き、日韓の共同研究を継続する必要があることから、「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅲ」をおこなうこととした。それに基づいて、展示協力についても一層推進していく。成果公開の場として、韓国国立中央博物館が2019年12月に開催する企画展示『加耶の本質』の内容に基づいて、歴博でも『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—』の開催が決定しており、その実現に向けて交流事業を推進する。

2. 今年度の研究計画

2025年度以降：展示協力や日韓の葬送儀礼の比較研究を軸として、学術交流を進める。学術交流協定を更新し、引き続き展示協力、学術交流を積み重ねていく予定である。

また、研究者間交流については、中央博側が、当館の「外国人研究員および外国人招へい研究者制度」に積極的に申請していく予定である。さらに、中央博から借用中の総合展示第1室「先史・古代」における中央博所蔵資料のメンテナンス（2年に1度、中央博担当者による点検など）も行っていく予定である。

3. 今年度の研究経過

・残念ながら、2025年度については、具体的な展示協力に関する交流を実施することはできなかった。

4. 今年度の研究成果

2025年度は、2022～2024年度を通じて行った国際企画展示『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—』（2022年度開催）に関連する事業を終了した翌年度であったこともあり、具体的な展示協力に関する交流を実施することはできなかった。また、「外国人研究員および外国人招へい研究者制度」の募集もなかった。しかしながら、引き続き、国際交流事業を継続し、今後の展示協力、学術交流の進め方について、折を見て協議していく予定である。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

○リュ・ジョンファン 国立中央博物館・学芸研究官

◎イ・ジョングン 国立中央博物館・考古歴史部長

○上野 祥史 本館研究部・准教授

三上 喜孝 本館研究部・教授
 ◎高田 貫太 本館研究部・教授

(2) 東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究 2023～2025年度 (事業主体者 三上 喜孝)

(3) 国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と 展示協力 2023～2025年度 (事業主体者 高田 貫太)

1. 目 的

2023年度より、学術交流協定を3年間延長した。

総合展示第1室リニューアルが2019年3月に完成したことで、今後10年間、資料の借用が継続するため、定期的な資料チェックなどを目的とし、展示協力事業を継続していく。釜山大学校博物館から資料借用の要請があった際には、本館側も積極的に検討していく。

第3期より継続している研究者交流は、朝鮮半島南部の初期鉄器時代を中心に出土する弥生系土器の調査や、朝鮮半島の新石器時代から三国時代にかけての日韓交流関連資料の調査など、新たな研究テーマでの展開を模索している。

このような展示や研究者交流を通じて互いの研究内容への理解を深めながら、新しい事業・共同研究のシーズを見出していくことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①研究者交流 両機関は互いに研究者1名を10日ほど派遣し、研究交流を促進する。
- ②展示協力 本館総合展示第1室リニューアル事業において釜山大学校博物館から借用中の所蔵資料のメンテナンス。

3. 今年度の研究経過

- ・2025年11月13日、歴博教員1名が釜山大学校博物館の招へいを受け、学部生および大学院生に対して「青銅器を眺める科学の目」と題した最新の理化学分析を用いた青銅器研究に関する特別講義をおこなった。
- ・2025年11月12日～15日の日程で歴博教員のべ2名が釜山大学校博物館を訪問し、研究交流を実施した。
- ・2026年2月20日～26日の日程で釜山大学校博物館の研究員3名が訪日し、東京都や群馬県の博物館などで歴博教員を含めた研究者と交流を実施した。
- ・釜山大学校博物館の特別共同研究員1名を2026年2月26日より1年間、外来研究員として受け入れている。

4. 今年度の研究成果

研究計画通り、研究者交流を実施し、自然科学と考古学の学際的研究、博物館展示の今後の展望について、学術交流を進展することができた。あわせて、本事業と関連付けながら、釜山大学校博物館の特別共同研究員1名を歴博の外来研究員として受け入れることにより、若手研究者育成にも貢献している。さらに、招へい外国人研究者制度を活用して、釜山大学校考古学科教員1名（李昌熙氏）が、2025年5月の1ヶ月歴博にて研究を行ったことにより、両機関の学術交流がいっそう進展した。今後は、これらの共同研究のシーズを具体的な成果に結び付けていきたい。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

- 安 星姫 釜山大学校博物館・学芸研究室長
- ◎林 尚鐸 釜山大学校博物館・館長
- 箱崎 真隆 本館研究部・准教授
- 坂本 稔 本館研究部・教授
- 齋藤 努 本館研究部・教授

- 中村 耕作 本館研究部・准教授
 ◎高田 貫太 本館研究部・教授
 山下 優介 本館研究部・テニユアトラック助教

(4) 日本と台湾からみた地域歴史像の解明 2023～2026年度 (事業主体者 山田 慎也)

1. 目的

国立歴史民俗博物館と国立台湾歴史博物館は、2013年に共同研究を準備しはじめ14年に包括協定を締結し、以降2期にわたり共同研究を継続してきた。第1期の具体的主題は震災経験であり、第2期のそれはスポーツの歴史的意味であった。いずれも各館その他で展示および展示図録の刊行、研究集会実施を通じて、国際社会への発信もおこなっている。3期目となる今期は、国立台湾歴史博物館との共催及び台南市立博物館の協力で2024年11月26日～2025年1月26日まで歴博総合展示第3展示室において、特集展示「歴史・文化の中の鄭成功」を開催した。展示は、鄭成功が生きた17世紀、日本で新たな物語へと変容する18世紀、そして近現代という3つの時代を通じて、台湾と日本の歴史と文化のつながりを明らかにするという内容である。また総合展示新構築の近現代展示室リニューアル事業に関連して、継続的な共同研究も視野に入れる。これまで共同研究を展開する上で、国立台湾歴史博物館の近隣にある国立成功大学など、各機関と研究者同士のネットワークを構築してきたが、covid19への各国の方針の相違なども生じ、ここ数年は直接の交流が困難な状況にあった。この状況に鑑みて、双方の研究交流を組織的に発展させ強固なものにすることも目的のひとつとする。

2. 今年度の研究計画

本館教員の2～3名を年間1～2回派遣する。特に総合展示新構築の近現代展示室(第5・第6展示室)リニューアル事業に関連して、台史博と意見交換を行うとともに共同研究を行う。

3. 今年度の研究経過

近現代展示室リニューアル事業に関連して、2025年8月18日に国立台湾歴史博物館を訪問し、陳怡宏研究組長らと日清戦争の展示視角・展示方法に関する共同研究会を行った。また、この研究会での議論を踏まえて、リニューアルされる歴博近現代展示において、多様な視点・素材から日清戦争を構成する国立台湾歴史博物館の展示風景を紹介することとし、展示室の写真撮影を実施した。2026年3月16日、張隆志館長・陳怡宏研究組長を来賓として招聘し、近現代展示室のオープニングセレモニーと内覧会を挙行了した。

4. 今年度の研究成果

2025年8月18日の国立台湾歴史博物館での共同研究会、ならびに、2026年3月16日の張隆志館長・陳怡宏研究組長の近現代展示室オープニングセレモニー・内覧会への招聘を通じて、両博物館間の組織的な研究交流の基盤が築かれた。リニューアルされた近現代展示室では、国立台湾歴史博物館から多数の資料提供を受けるとともに、同館との共同研究の成果に基づいて展示を構築することができた。

5. 事業組織 (◎は事業主体者、○は副主体者)

- 石 文誠 国立台湾歴史博物館・研究組研究員
 ◎陳 怡宏 国立台湾歴史博物館・研究組長
 ○内田 順子 本館・副館長
 ◎山田 慎也 本館・副館長
 西谷 大 本館・館長
 大串 潤児 本館研究部・教授
 佐川 享平 本館研究部・准教授

(5) 北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援 2023～2026年度 (事業主体者 日高 薫)

1. 目 的

ダラム大学は、北部イングランドに位置する英国を代表する名門大学であり、エジプト・中国・日本資料を豊富に所蔵する大学附属の東洋博物館は、学生の教育利用のみならず、近隣の学校や住民に親しまれる地域博物館の役割も果たしている。

本事業においては、同館をはじめとする北部イングランド所在の日本資料や、スコットランド所在の日本資料を用いた展示を、現地および日本において開催し、教育事業と連携させることにより、英国所在の日本関係資料の活用を充実させることを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①三木美裕氏を含め国立歴史民俗博物館から研究者を派遣し、北部イングランドおよびスコットランドにおける日本美術関連資料の調査をすすめる。
- ②ダラム大学、スコットランド国立博物館、ウェールズ国立博物館、大英博物館に分割寄贈されたハイアット・キング夫妻旧蔵日本陶磁コレクションについて、ダラム大を中心に各所蔵機関と連携し、調査・整理・カタログ化や展示教育活用等について協議のうえ事業を進める。
- ③ダラム大学東洋博物館所蔵資料を用いた特集展示を、ダラム大学東洋美術館において共同開催するため、準備を進める。
- ④ロンドンの日本大使館、ナショナルトラスト等と連携して、日本資料・日本文化関連の啓蒙活動（講演会等）を推進する。

3. 今年度の研究経過

- ①三木美裕氏をイギリスに派遣し、ダラム大学東洋美術館のレイチェル・パークレー東洋博物館学芸主任、クレイグ・パークレー同館館長とともに、歴博と同博物館とのMOU締結に関する打ち合わせをおこなうとともに、ダラム大学東洋博物館所蔵資料を用いた特別展開催へむけて準備をすすめた。
- ②歴博との共催で「Echoes of Friendship: The Squire Family in Meiji Japan ～A story of cultural exchange and enduring connection」邦題：「響きあう友情、明治期のスクワイア一家～文化をこえた揺るぎない絆の物語」（2025年11月25日～2026年3月22日、ダラム大学東洋博物館）を開催した。また、展示に関連して、スクワイア家の日本滞在時と重なる時代を紹介する朗読と音楽の催し「ラフカディオ・ハーン・プロジェクト」を歴博、ダラム大学音楽学部、東洋博物館の共催で開催した（2026年3月18日）。
- ③歴博とダラム大学との研究協力のため、山田副館長がダラム大学を訪問し、MOUを締結した（2025年11月24日署名式）。
- ④ダラム大学、スコットランド国立博物館、ウェールズ国立博物館、大英博物館に分割寄贈されたハイアット・キング夫妻旧蔵日本陶磁コレクションの調査・目録化・活用等について、三木を中心に事業を進めた。
- ⑤本交流事業の成果が評価され、東洋博物館のレイチェル・パークレー学芸部長が、日本国外務省の「外務大臣表彰」を受賞した。また、研究連携事業の継続のため、三木が正式にダラム大学客員研究員に任命され（2025年9月～）、昨年度に引き続き大学における講義や東洋美術館への協力事業をおこなった。
- ⑥事業の重要性や日本文化に関する理解を深めるため、三木が、ロンドンの英国日本協会（the Japan Society）における講演会で在英日本資料調査の成果を報告した。

4. 今年度の研究成果

日本文化に関する常識や理解の度合いが国内とは著しく異なる海外においては、様々な制約があり、現地の実情やニーズに応じた日本文化発信が求められる。そこで本事業では、連携機関の担当者との対話を重ねることによって、日本的な価値観の一方的な押しつけではなく、現地が求める資料情報の提供や、活用のための支援事業を推進し、新しいスタイルの《日本展示》の実践を試みている。

今年度は、2024年度に日本で開催した特集展示「スクワイア家の記憶—ある英国人技術者の遺品から—」（国立歴史民俗博物館）に引き続き、今度は所蔵先のダラム大学東洋美術館において、従来展示機会がほとんどなかったスクワイア家関係資料を公開する展示を開催することにより、調査研究の成果を広く還元し、イギリス所在の日本資料の価値を高めることができた。これら2つの展示は、企画・立案、展示品選定等の段階から日英の担当者の協議によって準備を進め、展示解説等も分担執筆したものであり、在外資料の多面性に光をあてることを目的として、それぞれ視点を変えた展示構成とした。国際連携による在外日本資料活用のモデルケースとして高い評価を得

た。

5. 事業組織（◎は事業主体者，○は副主体者）

◎レイチェル・パークレー ダラム大学東洋博物館・学芸部長

クレイグ・パークレー ダラム大学東洋博物館・館長

澤田 和人 本館研究部・准教授

工藤 航平 本館研究部・准教授

三木 美裕 本館・共同研究員

◎日高 薫 本館研究部・教授

○鷲頭 桂 本館研究部・准教授

（6）日韓共同による民俗研究の新構築 2023～2027年度 （事業主体者 松田 睦彦）

1. 目 的

本事業は3期15年にわたって積みあげられてきた本館と韓国国立民俗博物館との交流による学術的実績と信頼関係をさらに進展させ、日韓の研究者の協力によって民俗研究の新たな領域を開拓することを目的とする。具体的には、両館の研究者の関心にもとづいた調査・研究活動を相手国において実施し、その成果を研究会等で共有することで、従来の研究では見落とされていた日韓、あるいは東アジアをフィールドとした課題の発見を目指す。さらに、その課題を解決するための国際共同研究のあり方について模索する。

2. 今年度の研究計画

2023年度に本事業の研究内容が、日韓の農耕図（耕織図）をとりあげ、美術史的な成果をふまえたうえで、そこに描かれた農耕・漁撈・芸能・年中行事等の内容を、民俗学的、歴史学的に分析し、日韓の民俗や社会制度等の比較を試みることに決定した。2025年度は2024年度に引き続き、日韓両国において耕織図の調査を実施した。なお、実施にあたっては基幹研究「東アジアにおける文化の伝播と地域的展開に関する学際研究—「耕織図」の日韓比較を中心として—」および展示プロジェクト「東アジアの耕織図（仮）」と連携した。

3. 今年度の研究経過

5月8日（木）～12日（月）の日程で訪韓し、韓国国立農業博物館における耕織図調査、洪川ギョリ農耕文化現地調査、原州メジ農楽現地調査、安東織物現地調査、慶州紬織現地調査等を実施した。

6月6日（金）～9日（月）の日程で韓国民博のメンバーが来日し、佐賀県立博物館における耕織図調査、太宰府天満宮における田植え神事調査、久留米絰調査、うきは市における絵馬調査、福岡市博物館における耕織図調査を実施した。

11月6日（木）～8日（土）の日程で訪韓し、7日（金）に韓国国立民俗博物館において第4回韓日学術交流国際学術大会「耕織図—韓日農耕生活文化—」を両館共催で開催した。歴博からは西谷館長の招待講演のほか5名が発表した。

1月31日（土）～2月1日（日）の日程で韓国民博のメンバーが来館し、研究会を開催した。日本から3名が、韓国から2名が発表した。

4. 今年度の研究成果

今年度は日韓における現地調査や資料調査を実施し、両国における農耕や織物の文化、耕織図への理解を深めることができた。さらにその成果は学術大会や研究会での発表をとおして共有され、活発な議論が交わされた。本交流事業の成果は2027年度に日韓で開催される企画展示で公開する予定である。日韓それぞれにおける耕織図の受容の様相や独自の展開を展示で示すべく、展示内容の構想についても話し合いが進められている。

5. 事業組織（◎は事業主体者，○は副主体者）

- ◎キム・ユンジョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究官
 ジョン・ヨンハク 韓国国立民俗博物館・課長
 ヨム・フェジェ 韓国国立民俗博物館・学芸研究士
 イ・スヒョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士
 ジョ・スヒョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士
 大久保純一 本館・教授
 ○関沢まゆみ 本館・教授
 ◎松田 陸彦 本館・教授
 工藤 航平 本館・准教授
 鷲頭 桂 本館・准教授

〔国際シンポジウム〕

国際シンポジウム

「幕末外交と日本コレクション—遣外使節団の贈答品を探して」

International Symposium: Gifts of Diplomacy: The Japanese Missions and Their Legacies in Collections

開催日時：2026年1月10日（土）・11日（日）

会 場：一橋講堂

〒101-8439 東京都千代田区一ツ橋2丁目1-2 学術総合センター2F

（ウェビナー・ハイブリッド開催）

主 催：人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

人間文化研究機構 共創先導プロジェクト（共創促進研究）日本関連在外資料調査研究「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」

使用言語：日本語・英語（同時通訳あり）

参 加 者：340人（うち外国人37人）

1. 開催趣旨

国立歴史民俗博物館を中心とする研究グループは、日本が欧米諸国との外交を樹立する幕末期、条約締結各国との間に交わされた贈答品に注目し、海外に伝わる日本からの贈品の調査と関連史料の研究を進めてきました。欧米の研究者とともに、万延元年（1860）と文久2年（1862）の遣米・遣欧使節団関係品を中心に、贈答美術品の所在確認と実地調査をおこなった結果、多くの伝世資料を把握するに至っています。シンポジウムでは、最新の調査報告をもとに、外交において《もの》が果たした役割について考察し、贈答品の文化史的意義を探ります。

2. プログラム

[総合司会：鷲頭 桂（歴博）]

1月10日（土）

13：30～13：40 開会挨拶 西谷 大（歴博・館長）

13：40～13：50 趣旨説明 日高 薫（歴博）

第1部：幕末使節団と各国にのこる贈答品

[司会：日高 薫]

13：50～14：15 ①吉崎雅規（横浜開港資料館）

幕末期幕府の遣外使節と江戸の世相

14：15～14：40 ②福岡 万里子（歴博）

幕末期徳川外交と遣米使節贈答品

14：40～15：05 ③エステル・ボエール（フランス国立ギメ美術館）

遣欧使節団関係の調査研究現状—フランスのコレクションを中心に

15:05~15:20 (質疑応答)

15:20~15:30 (休憩)

[司会：高岸 輝]

15:30~15:55 ④レイチェル・ピート＝アンダーヒル (ロイヤル・コレクション・トラスト) (ビデオ発表)

江戸幕府からヴィクトリア女王への贈答品 (1860・1862・1864年) — 展覧と分配

15:55~16:20 ⑤アレクサンドラ・クルヴェロ (リスボン新大学)

19世紀における日本からポルトガルへの外交贈答品

16:20~16:45 ⑥ダン・コック (オランダ国立世界博物館)

文化価値の誤解—オランダにおける日本外交贈答品の受容

16:45~17:00 (質疑応答)

1月11日 (日)

第2部：外交贈答品について考える

[司会：福岡 万里子]

9:30~9:55 ⑦高岸 輝 (東京大学)

幕末画壇の展開と文久遣欧使節 (1862) — 徳川家茂から欧州君主に贈られた絵画を中心に—

9:55~10:20 ⑧日高 薫 (歴博)

幕末遣外使節がもたらした漆工芸品

10:20~10:45 ⑨鄭 美娟 (韓国国立晋州博物館)

近世幕府外交と朝鮮国王に贈られた屏風—韓国での再発見と玉里島津家模本の新出を機に

10:45~11:00 (質疑応答)

11:00~11:15 (休憩)

11:15~11:40 ⑩荒木 和憲 (九州大学)

近世日本の外交書簡における金銀装飾料紙の使用

11:40~12:05 ⑪ジラルデッリ青木 美由紀 (イスタンブール工科大学)

「エジプト王」への贈答品—スエズ運河開通前夜のカイロとオスマン帝国・日本の最初の接触

12:05~12:15 (質疑応答)

(昼食)

総合討論

[司会：エステル・ボエール, 高岸 輝]

13:30~15:10

パネル発表①黒川 廣子 (東京藝術大学大学博物館) 使節団贈答の置物 (主に金工と水晶について)

パネル発表②荒川 正明 (学習院大学) 使節団贈答の陶磁器

パネル発表③松島 仁 (静岡県富士山世界遺産センター) 狩野董川中信筆「富士飛鶴図」と徳川将軍の外交贈答品としての絵画

パネル発表④佐藤 寛介 (東京国立博物館) 日本甲冑の象徴性

全体討論 登壇者全員

15:10~15:15 閉会の挨拶 三浦 篤 (大原美術館・館長)

3. 総括

共創先導プロジェクト (共創促進研究) 日本関連在外資料調査研究「外交と日本コレクション」は、19世紀に形成された欧米所在の日本コレクション (もの資料および関連史料) を対象とし、「外交」という視点から日本と諸外国との関係性の歴史に注目することによって、グローバル時代に相応しい新たな枠組みによる在外日本資料調査の方法を提唱し実践している。

本シンポジウムは、幕末の遣外使節団が条約締結国の君主に贈った美術品について、王室関係機関や大統領府等に現存する実物資料と国内外に残る文献資料との両面から考察した国際共同研究の成果であり、上記プロジェクト

の中間成果総括としての意味合いをもつ。従来知られていなかった使節団贈答品の7カ国における伝世状況や、贈答品選定・制作の具体的経緯と外交的背景、海外における受容・分配・離合の実態、外交儀礼における贈答の伝統と変容などを解明し、最新成果を対面・オンラインのハイブリッド開催により初めて発信した。

日本における外交贈答品研究は立ち後れてきたため、海外における贈答品研究の空白部分を補う著しい貢献として注目される。また美術史研究と文献資料研究との協働の有効性を立証する研究としても発展性が見込まれる。従来公開の機会が少なかった王室コレクション等が所蔵する多くの未紹介資料に光を当てたものであり、国家間における外交や文化交流を背景とした現代につながる研究である点から、各分野の研究者や市民・報道関係者の関心を喚起し、参加者からは多くの新情報の提供と、今後の研究の進展に対する期待が寄せられた。発表者：15名（うち6名は海外からの参加）、参加・視聴人数：のべ587人、参加者国籍：欧米・アジア・中東を含む15カ国。2028年度に日英語による報告論集を刊行予定である。

[外国人研究員]

氏 名	所 属	研究課題	期 間
パク チョロン	国立公州大学校	古墳時代（韓国の古墳時代）における朝鮮半島と倭の儀礼の比較研究 古墳	2025.9.1～ 2026.2.27

[外国人招へい研究者]

氏 名	所 属	研究課題	期 間
イ チャンヒ	釜山大学校	GISを活用した空間分析による日韓交流関係の再検討	2025.5.12～ 2025.6.16
カン ドンソク	東国大学	時空間データマインドに基づく初期農耕社会の集落動態の研究—放射線炭素年代とGISの活用—	2025.12.22～ 2026.3.12

[協定締結機関との交流]

招 聘			
氏 名	所 属	用 務	期 間
陳 怡宏	台湾 国立台湾歴史博物館	5室リニューアルオープンセレモニー	2026.3.16
張 隆志	台湾 国立台湾歴史博物館	5室リニューアルオープンセレモニー	2026.3.16
キム スンユ	韓国 韓国国民俗博物館	5室リニューアルオープンセレモニー	2026.3.16
チャン サンフン	韓国 韓国国民俗博物館	5室リニューアルオープンセレモニー	2026.3.16

派 遣 ※協定機関における用務を抜粋			
氏 名	行 先	用 務	期 間
齋藤 努	韓国 釜山大学校博物館	釜山大学校博物館展示資料見学	2025.11.13～ 2025.11.14
山下 優介	韓国 釜山大学校博物館	釜山大学校博物館展示資料見学	2025.11.13～ 2025.11.14
西谷 大	台湾 国立台湾歴史博物館 国立台湾文学館	総合展示第5室用「台湾民主国国旗」展示風景についての写真撮影・打合せ	2025.8.15～ 2025.8.19
大串 潤児	台湾 国立台湾歴史博物館 国立台湾文学館	総合展示第5室用「台湾民主国国旗」展示風景についての写真撮影・打合せ	2025.8.17～ 2025.8.19
佐川 享平	台湾 国立台湾歴史博物館 国立台湾文学館	総合展示第5室用「台湾民主国国旗」展示風景についての写真撮影・打合せ	2025.8.17～ 2025.8.19
福岡 万里子	アメリカ スミソニアン歴史博物館	19世紀日米関係史に関する資料・展示・文献資料の調査撮影・見学・収集	2026.3.21～ 2026.3.31
日高 薫	アメリカ スミソニアン歴史博物館	在米日本関係資料調査および撮影	2026.3.22～ 2026.3.29
酒井 康平	アメリカ スミソニアン歴史博物館	在米日本関係資料調査および撮影	2026.3.22～ 2026.3.29
澤田 和人	アメリカ スミソニアン歴史博物館	在米日本関係資料調査および撮影	2026.3.22～ 2026.3.29

[海外派遣]

氏 名	行 先	用 務	期 間
科学研究費補助金			
川邊 咲子	インドネシア	歴史情報学に関する国際連携と共同研究，サテライト構築に向けた打ち合わせ	2025.6.23～ 2025.6.29
小野塚 航一	インドネシア	歴史情報学に関する国際連携と共同研究，サテライト構築に向けた打ち合わせ	2025.6.23～ 2025.6.30
橋本 雄太	インドネシア	歴史情報学に関する国際連携と共同研究，サテライト構築に向けた打ち合わせ	2025.6.23～ 2025.6.30
鷺頭 桂	韓国	高麗朝鮮絵画と日本絵画の比較研究	2025.6.27～ 2025.6.28
後藤 真	インドネシア	学術変革領域研究A「歴史情報学の創成」	2025.6.27～ 2025.6.28
坂本 稔	ポーランド	基盤A「高精度単年輪14C測定による弥生から古墳の暦年校正の高解像度化」	2025.6.28～ 2025.7.5
後藤 真	ポルトガル	学術変革領域研究A「歴史情報学の創成」	2025.7.14～ 2025.8.5
山田 慎也	カナダ	基盤B「引き取り手のない死者の公的対応に関する文化的研究—誰もが安心して死を迎えるために」	2025.7.29～ 2025.8.9
高田 貫太	韓国	基盤B「航路・寄港地から見た倭と古代朝鮮の交渉史に関する日韓共同研究」	2025.9.18～ 2025.9.21
福岡 万里子	アメリカ	①基盤B「『不平等条約』の系譜再考：修好通商条約と日米安保条約の比較研究」②基盤C「幕末明治初期『不平等条約』形成過程の多国籍史料に基づく再検討」	2025.8.16～ 2025.9.2
橋本 雄太	ドイツ	学術変革領域研究（A）「歴史知識辞書（ナレッジベース）の構築」	2025.9.8～ 2025.9.15
平峯 玲緒奈	ベトナム	挑戦的研究（萌芽）「3世紀に軽石筏は出現したか？」	2025.8.16～ 2025.8.24
吉井 文美	中国	基盤C「国際企業としての開ラン鉱務総局と近代東アジア国際関係の再検討」	2025.8.22～ 2025.8.31
佐野 雅則	タイ	基盤（S）「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」	2025.11.7～ 2025.11.13
平峯 玲緒奈	オーストラリア	研究活動スタート支援「考古遺跡中の漂着軽石に基づく海域火山の噴火履歴解明の試み」	2026.1.24～ 2025.1.31
後藤 真	ドイツ	EJRSプレイベントの運営（9日）及びEJRS2025に参加 情報収集およびネットワーキング 計画班による成果報告情報の収集（10-13日）	2025.9.9～ 2025.9.13
吉井 文美	アメリカ	科研のテーマに関わる資料調査，現地の研究者との意見交換	2025.11.10～ 2025.11.14
日高 薫	エジプト	基盤（A）「エジプト所在の日本美術品調査」	2025.11.8～ 2025.11.19
上 菜穂美	台湾	学術変革領域研究（A）「カラフトブタとは何か：オホツク文化の家畜飼養の役割」	2025.12.12～ 2025.12.16
鷺頭 桂	シンガポール	①基盤C「桃山美術」史観の再構築—中近世移行期における伝統と革新の考証を通して— ②基盤研究経費4「欧文資料にみる近世初期日本の国際交流と文化・美術との相関」	2026.2.11～ 2026.2.14
松田 睦彦	台湾	基盤B「朝鮮海出漁資料からみた植民地社会の実態研究」	2026.1.14～ 2026.1.18

氏 名	行 先	用 務	期 間
モリス ジェームス	イギリス	若手研究「Syriac Christianity, Syriac Studies and Modern Japan: An Intellectual History」	2026.2.17～ 2026.2.26
モリス ジェームス	カナダ	①若手研究「Syriac Christianity, Syriac Studies and Modern Japan: An Intellectual History」②共創先導P研究推進費(DH促進事業)	2026.3.11～ 2026.3.17
澤田 和人	アメリカ	①基盤A「日本染織文化資源の再発見とその活用」に資する基盤研究」②教員研究経費	2026.3.22～ 2026.3.29
平峯 玲緒奈	ベトナム	挑戦的研究(萌芽)「3世紀に軽石筏は出現したか？」	2026.3.15～ 2026.3.20
橋本 雄太	韓国	東アジア日本研究者協議会 第9回国際学術大会の参加及び発表	2025.10.30～ 2025.11.3
若木 重行	チェコ共和国	国際学会研究発表	2025.7.4～ 2025.7.14
後藤 真	カナダ	AAS2026に参加・情報収集・ネットワーキング	2026.3.11～ 2026.3.19
橋本 雄太	シンガポール	ガレオン貿易および交易品を中心とするアジア・スペイン帝国交流の調査	2026.2.11～ 2026.2.14
基幹研究プロジェクト等			
石井 康平	インドネシア	日本歴史文化知に関する国際連携と共同研究打合せに関する補助	2025.6.23～ 2025.6.29
寺村 美南	ドイツ	第35回日本資料専門家欧州協会年次大会「日本研究と図書館の変遷：江戸時代から現代まで」ブース出展に関する打合せ、プレイベント視察及び大会への参加	2025.9.8～ 2025.9.15
日高 薫	ドイツ	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2025.9.8～ 2025.9.20
工藤 航平	ドイツ	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2025.9.9～ 2025.9.20
酒井 康平	ドイツ	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2025.9.9～ 2025.9.20
日高 薫	オーストリア	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2026.2.28～ 2026.3.8
工藤 航平	オーストリア	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2026.2.28～ 2026.3.8
鷲頭 桂	オーストリア	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2026.2.28～ 2026.3.8
酒井 康平	オーストリア	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2026.2.28～ 2026.3.8
モリス ジェームス ハリー	カナダ	論文発表, AASで行う歴博の展示の手伝い	2026.3.11～ 2026.3.17
その他の調査・研究・学会・シンポジウム等			
吉井 文美	台湾	台湾中央研究院での5・6室における資料調査	2025.6.4～ 2025.6.6
吉井 文美	サイパン(アメリカ)	NMI MUSEUMでの資料調査	2026.3.17～ 2026.3.20
後藤 真	ベトナム	PNC2025にて副指導担当学生の発表支援及び指導, DH関連成果報告	2025.9.18～ 2025.9.23
モリス・ジェームス・ ハリー	イギリス	バーミンガム図書館における資料調査, セントアンドルーズ大学におけるCSR Seminar及び講義	2025.9.20～ 2025.9.28
キム ヘイン	韓国	韓国の耕織図調査および韓日学術交流関連学術大会への参加	2025.11.6～ 2025.11.8
齋藤 努	韓国	釜山大学校博物館展示資料見学	2025.11.12～ 2025.11.14
山下 優介	韓国	釜山大学校博物館展示資料見学	2025.11.12～ 2025.11.14

氏 名	行 先	用 務	期 間
山田 慎也	イギリス	ダラム大学東洋博物館展示オープニングセレモニー参加、関係機関への表敬訪問と調査	2025.11.22～ 2025.11.29
橋本 雄太	カナダ	AASに参加・情報収集・ネットワーキング	2026.3.11～ 2026.3.17
他の研究機関の依頼による海外調査・研究等			
高田 貫太	韓国	大韓民国羅拏文化財研究院招へい発表	2026.3.26～ 2026.3.28
西谷 大	韓国	韓国の耕織図調査および韓日学術交流関連学術大会への参加	2025.11.6～ 2025.11.8
松田 睦彦	韓国	韓国の耕織図調査および韓日学術交流関連学術大会への参加	2025.11.6～ 2025.11.8
関沢 まゆみ	韓国	韓国の耕織図調査および韓日学術交流関連学術大会への参加	2025.11.6～ 2025.11.8
工藤 航平	韓国	韓国の耕織図調査および韓日学術交流関連学術大会への参加	2025.11.6～ 2025.11.8
鷺頭 桂	韓国	韓国の耕織図調査および韓日学術交流関連学術大会への参加	2025.11.6～ 2025.11.8
鷺頭 桂	イギリス	大英博物館「Samurai」展における資料貸与にかかるクーリエ業務	2026.1.21～ 2026.1.25
天野 真志	トルコ	「日本とトルコにおける文化財防災」における発表及び現地視察	2026.2.10～ 2026.2.15